地域シリーズ　：　銀閣寺から『法然院通』を南へ

レポート 119 では銀閣寺から北に上がって大文字山に向かいましたので、今回は哲学の道の山側を南北に走る『法然院通』を巡り歩きました。この通りは琵琶湖疏水ができる以前からあり、南禅寺から鹿ヶ谷を通って銀閣寺に行く道でした。通り沿いには法然院をはじめ、安楽寺や霊鑑寺が並び、大文字山の斜面を活かした庭園が造られています。「椿の寺」として知られる霊鑑寺には、「プリンセス雅子」と書かれた苗木もありましたのでご覧下さい。

《ご紹介》

南禅寺から北に上がる琵琶湖疏水分線は、銀閣寺の門前で急に左に折れて西方に流れを変える。どうしてだろう？

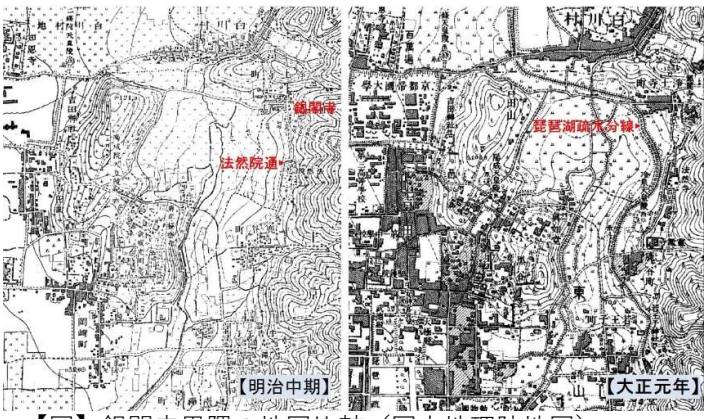
1890（明治 23）年に竣工した疏水分線は、銀閣寺北西の山・半鐘山にぶつかって流路を西に変えているのである。しかも疏水の水位を蹴上船溜から大きく変えないよう、標高 75 メートルあたりの等高線をなぞるように流路を決定している。このため、疏水分線は銀閣寺門前から吉田山の北側まで西に流れ、京大グランドの東側を北上している。

疏水分線ができる前の地図【図】を見ると、銀閣寺へは吉田山の北側を東に向かう道と、南禅寺から鹿ヶ谷を通って大文字山の山裾を北に向かう道の 2 本がある。前者は現在の今出川通として拡幅整備されたが、後者は法然院通として当時の姿をとどめている。この通り沿いには法然院や霊鑑寺などが並んでいるので、銀閣寺から法然院通を南に下った。

銀閣寺総門前から南に行くと境内地を避けるように道が折れ曲がる。ここが法然院。このあたりは、鎌倉時代はじめに法然上人が弟子とともに六時礼讃をつとめたと伝える旧跡で、1680（延宝 8）年、知恩院第 38 世萬無（ばんぷ）と弟子・忍澂（にんちょう）が法然ゆかりの地に念仏道場として再興した。

茅葺の山門を入ると両側に白砂壇（びゃくさだん）と呼ばれる盛り砂が備わり、講堂、経蔵、本堂へと続く。本堂奥の方丈は桃山御陵の遺物を移築したといわれ、狩野光信筆の襖絵と

➢　銀閣寺界隈



【図】銀閣寺界隈の地図比較（国土地理院地図）

➢　法然院

法然の六時礼賛
幾星霜

六時礼讃：昼夜の六時に仏を拝むこと

屏風は重要文化財。方丈庭園は中央に阿弥陀三尊を象徴する三尊石が配置された浄土庭園で、座敷などから眺める目的で造られた池泉鑑賞式庭園となっている。

法然院の南にある安楽寺は、法然上人の弟子・住蓮と安楽の両上人を開基とし、現在地より東１キロあたりで「鹿ヶ谷草庵」を結んだことにはじまる。浄土礼讃に感銘し、出家を申し出た後鳥羽上皇の女官・松虫と鈴虫が1206（建永元）年尼僧となったことから、激怒した上皇が、翌年両上人を斬首に処し法然を流罪とした。帰京した法然は、両上人の菩堤を弔うため荒廃した草庵を復興して「住蓮山安楽寺」とし、天文年間（1532～1555）の末、現在地に本堂が再建されたという。本堂は方形裳階造の堂宇を江戸後期に移築したもので、本堂東の数寄屋風書院も江戸末期に移築。茅葺の山門は 1892（明治 25）年に建立。これら 3 つの建物は国の登録有形文化財である。

安楽寺の南の霊鑑寺は、1654（承応３）年、後水尾天皇の皇女・多利宮（たりのみや）を開基として創建され、歴代皇女が住職を務めた尼門跡寺院。別名「谷の御所」。書院は後西院御所旧殿の一部を貞享年間(1684-88)に移建したもので、書院より一段高い位置にある本堂は、徳川家斉の寄進により 1803（享和 3）年再建という。庭園は大文字山から延びる稜線をうまく使って書院の南に作られており、江戸中期の作庭技法を用いた池泉鑑賞式庭園。そこには後水尾天皇遺愛の日光椿（じっこうつばき）をはじめ、数々の名椿が植えられている。書院・玄関・本堂・表門が有形文化財（建造物）、庭が名勝、日光椿が天然記念物として京都市の文化財に指定されている。

法然院通は山と平地の境にできた道であり、道の東側は大文字山の斜面である。法然院や霊鑑寺はこの地形を利用して池泉鑑賞式庭園を造っている。吉田山から比叡山にかけての西麓には花折断層帯が走り、大文字山の山裾にはその副次的な活断層として鹿ヶ谷断層が推定されている。この活断層は銀閣寺から法然院，永観堂，南禅寺などの直下を通過しているといわれており、法然院通沿いの寺院は、この地形を巧みに利用したものであった。

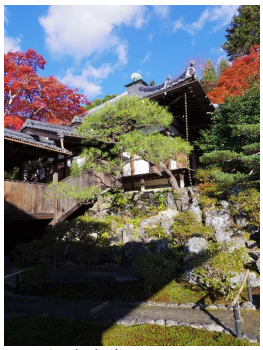
↑白砂壇

←法然院本堂

➢　安楽寺

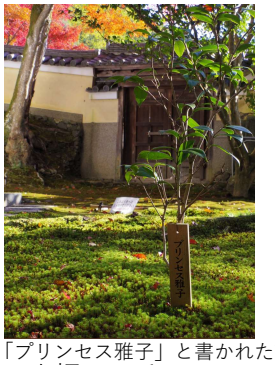
皇女たちに
聞き耳立てる
紅椿

➢　霊鑑寺



・霊鑑寺本堂

➢　法然院通



・「プリンセス雅子」と書かれた苗木